

テシマウ相当形式と発話行動の「ジャンル」との相関に関する研究

梁井 久江

1. はじめに

本稿では、助詞テ+補助動詞シマウに由来する一連の形式を「テシマウ相当形式」と呼ぶ。テシマウ相当形式には、テシマウの他、縮約によって生じたチマウ、チャウがあり、これらは、一般に、フォーマルな場面ではテシマウ、インフォーマルな場面ではチマウ・チャウという使い分けがあると言われている。しかし、実際には友達同士の雑談においてもテシマウが使われることがあるように、単なるフォーマリティの違いによって3者が使い分けられているとは考えられない。

本稿は、各テシマウ相当形式の分布の相違が発話行動の「ジャンル」の違いと関連しているかどうかを明らかにすることを目的とする。以下では、テレビ番組の文字化資料から、発話行動の違いによっていくつかの「ジャンル」を抽出したうえで、(1)「ジャンル」による出現数・出現形式の異なりがあるかどうか、(2)またそれはなぜか、といった点について考察を行う。

発話行動の「ジャンル」については、Hymes(1974)の術語に近い意味で用いる。Hymes(1974)では、「ジャンル(genre)」は発話を構成する一要素(Components of Speech)とし、その例として、物語、諺、礼拝、演説、手紙等が挙げられている。しかし、この場合、次元の異なる様々な「ジャンル」が混在していることから、「ジャンル」の違いにあずかる要因の特定が困難であり、ある特定の言語形式の使用と発話行動の「ジャンル」との相関をみるという本稿の目的には適さない。そこでここでは、テレビという一つの媒体に絞り、そのなかでの発話行動の違いによる「ジャンル」を考察することにした。

以下の考察に先立ち、テシマウ相当形式の文法的位置づけについて述べておく。

テシマウ相当形式の文法的意味に関する研究は、事態の実現・完結といった広義の「完了」を表す点に注目し、アスペクト形式であるとする研究(金田一 1955, 高橋 1969, 寺村 1984 他)と、実現する事態に対し話し手(発話者)が関与することで「取りかえしがつかない」「不都合」等の感情・評価の意味が生じる点に注目し、モダリティ形式であるとする研究(藤井 1992, 鈴木 1998 他)の二つに大別される。しかし、多くの研究では、一方の立場をとりつつも記述の際にはもう一方の特徴が考慮に入れられていることから、アスペクト的意味、感情・評価的意味のどちらも当該形式の記述に必須であるといえる。こうしたなか、本稿ではテシマウ相当形式を「ある事態が完了し、その完了後の段階に話し

手が注目することを表す形式」と定義する。したがって、感情・評価的意味を認めつつも、文法範疇としてはアスペクトにあたると考え、考察を進めるものとする。

2. 調査概要

話し言葉に現れる諸形式の研究では、自然談話を収録・文字化し、それを分析する実例研究が優先されている。しかし、その多くが話者同士の雑談を対象としているため、発話行動としては均質なものになりやすく、各形式とさまざまなジャンルとの相関をみる資料としては適当ではない。

そこで本稿では、自然談話資料ではなく、テレビ放送を文字化した資料を分析の対象とすることにした。これは、番組の種類や内容によってさまざまな発話行動がみられると予測したためで、より多くの発話行動のジャンルを抽出するのに適していると考えたからである。

取り上げた番組の種類は、表1に示したトーク番組、報道・ニュース番組、情報・バラエティ番組の3番組である¹。文字化にあたっては、読みやすさを優先し、話者の発話は全て漢字仮名混じりの表記とした。さらに、長音は「ー」で1拍分の長さを、不明瞭で聞き取れない部分は「××」、不明瞭で文脈から判断した部分は「[]」、発話中の聞き手のあいづち（短い発話が重なる場合も含む）は「()」、言いさしは「…」で示した。

こうして文字化した資料をもとに、まず、各番組が、談話の展開、文体（丁寧体か普通体か）、聞き手、話題等の点でどのような特徴をもつのか示し、番組間の共通点・相違点を整理した上で、発話行動のジャンルを抽出する。

次に、文字化資料からテシマウ相当形式を抽出し、テシマウ、チマウ、チャウそれぞれの出現度数を調べ、各形式と発話行動のジャンルとの間に何らかの相関関係があるかどうかを検討する。

表1 録音・文字化した番組

番組の種類	番組名	放送局	収録日	時間数計	文字数計	byte 数計
トーク	はなまる マーケット (はなまる カフェ)	TBS	・ 2003.08.25 ・ 2003.08.26 ・ 2003.09.26 ・ 2003.09.29	約 120 分	56269 字	105.7KB

報道・ ニュース	ニュース 7	NHK	・ 2004.11.16 ・ 2004.11.20 ・ 2004.11.28 ・ 2005.01.27 ・ 2005.01.29	約 150 分	45119 字	91.2KB
情報・ バラエティ	伊東家の 食卓	NTV	・ 2004.11.30 ・ 2004.12.14 ・ 2005.01.25	約 150 分	60017 字	117.6KB

3. テレビ番組の特徴と発話行動の「ジャンル」

第3節では、分析の対象とした3番組の特徴を示し、番組間の共通点・相違点を整理した上で、テレビ放送にみられる発話行動の「ジャンル」を5つ抽出する。

3.1 トーク番組の特徴

考察の対象としたトーク番組は、プライベート写真をゲストに予め撮ってきてもらい、それを見ながらホスト2人が質問し、ゲストが答えるという展開で進行する。生放送で撮り直しがきかない点、一方の質問に他方が回答する対話型である点で自然な会話にきわめて近いが、主たる目的がゲストの宣伝であるため、質問・回答の一連の流れが一方的で、より正確には、インタビュー形式の自然談話に近いものといえる。

トーク番組であるから、ホスト・ゲストともに話を盛り上げようと、自分自身の主観や感情を聞き手に伝える姿勢が見受けられ、感情形容詞や聞き手めあてのモダリティ形式が多用されている。

トーク番組が日常の自然な会話と明確に区別されるのは、会話の参加者であるゲストとホスト以外に、間接的な聞き手として、番組を収録しているスタジオへの来場者及び不特定多数の視聴者がつねに存在している点である。こうした事情から、発話の際には、直接の聞き手に加え、間接的な聞き手である不特定多数の来場者・視聴者に対しても待遇上考慮することが必要になってくる。

3.2 報道・ニュース番組(読み上げ／中継)の特徴

報道番組は、その日のニュースのヘッドライン、それぞれのニュースの詳細、気象情報という展開をとり、視聴者に対し事件や出来事に関する情報を提供する。生放送で撮り直しがきかない点はトーク番組と共通しているが、放送の大部分を放送原稿の読み上げが占

めている点で異なっている。

アナウンサーによる読み上げは、推敲が重ねられた書き言葉的な原稿をもとにしており、文体も丁寧体に統一されている。また、トーク番組と異なり、発話の直接的な聞き手が存在しないことから、非対話的といえる。聞き手として想定されているのは、もっぱら不特定多数の視聴者という間接的な存在であり、アナウンサーが発話の際に考慮する待遇は、通常視聴者に対するものである。

ただし、アナウンサーと現地記者や特派員との間の中継は対話型をとり、日常の自然な会話に近いものとなる。また、事件に関わった一般の人の発話や政治家の記者会見の発話も対話型をとることがある。

このことから、報道・ニュース番組は、非対話型を基調としつつ、場合によっては対話型が盛り込まれるという談話展開をみせるといえる。

また、報道・ニュースの場では、いかなる出来事に対しても、できるだけ公平な態度で、客観的に伝えることが求められる。このため、原稿の読み上げであろうと中継時の記者の発話であろうと、発話者の主観や感情が前面に出るような発話は普通回避されている（畠1983の「無署名場面」に関する記述を参照）。

3.3 情報・バラエティ番組(読み上げ／会話)の特徴

考察した番組は、日常生活に役立つ情報（番組内では「裏技」と呼んでいる）を、一般の視聴者からのビデオ投稿、スタジオでの実演によって次々と紹介する展開をとっている。放送時間の大部分は、出演者同士の会話とナレーターによる原稿の読み上げである。前者は対話型で、文体が変動する可能性がある。これに対し後者は、推敲が重ねられているので、文体の変動はあまりない。

この番組では、原稿の読み上げか否かに関わらず、*·de-wa>zya*, *·te-i(-ru)>·te(-ru)*, *·keredo(mo)>·kedo* 等の音声的に縮約された形式、テ形による中止形、引用の標識 *·Qte*, *·yo*, *·ne*, *·no-da* といったモダリティ形式等、話し言葉に典型的な言語形式が多用されている。また聞き手をめあてとする *·yo*, *·ne* 等の多用からは、自分自身の主観や感情を聞き手に伝えようとする働きが強いこともわかる。

また、この番組のコンセプトは、日常生活において役に立つ情報を提供することであり、番組をみた視聴者がこれを実践することが期待されている。したがって、「皆さんもぜひ一度試してみてください」等、情報の実践を促す発話が頻繁に現れ、全体としても視聴者に何らかの行為を働きかける傾向が強い。この傾向は、次々に情報を紹介するナレーターの発話に顕著である。番組の性質上、出演者同士の会話にも聞き手に行為を働きかける発話

があるが、ナレーターの発話ほど徹底していない。

トーク番組と報道・ニュース番組には、視聴者に役立つ情報を提供し、その情報を奨励する積極的意図はない（もちろん、結果的に視聴者にとって有益な情報になることはあるが）。

3.4 発話行動のジャンル

ここまで、3 種類のテレビ番組の特徴について検討し、種類の異なる番組間で共通する特徴がある一方で、談話の型などの点で同一番組内にも異なる特徴があることがわかった。このことは、番組別の考察よりもジャンル別の考察の方が妥当であることを示すとともに、諸ジャンルが、談話の型、話し言葉の可否かといった要素ごとの差異を検討することによって記述できることも示唆している。

ここでは、発話行動を構成する要素を6つ設定する（表2参照）。「談話型」とは、談話の型を表し、対話型か非対話型かに分かれる。「文体の変動性」とは、文体の変動のしやすさを指し、内容に推敲が重ねられている場合ほど低くなる。「聞き手」とは、話者が発話の際に待遇を考慮する相手のことである。「口語性」とは、話し言葉に典型的にみられる言語形式を多用するかどうかを表すもので、多用される場合ほど高くなる。「感情の表出」とは、発話者が自分の主観や感情を聞き手に伝えようとしているかどうかを表すもので、そうした発話が多いほど「感情の表出」の程度は高くなる。「行為の働きかけ」とは、発話が聞き手に何らかの行為を促す機能をもつかどうかを表すもので、そうした発話が多いほど「行為の働きかけ」の程度は高くなる。

表2 発話行動のジャンル

要素 ジャンル	談話型	文体の 変動性	聞き手	口語性	感情の 表出	行為の 働きかけ
トーク	対話型	高	会話の相手 (視聴者) ⁱ⁾	高	高	低
報道・中継	対話型	中	会話の相手 (視聴者) ⁱ⁾	中	低 ⁱⁱ⁾	低
報道・読み上げ	非対話型	低	視聴者	低	低	低
情報・会話	対話型	高	会話の相手 (視聴者) ⁱ⁾	高	高	中
情報・読み上げ	非対話型	低	視聴者	高	高	高

i) ()は、間接的な聞き手(脇の聞き手)であることを表す。
ii) インタビューや記者会見時の一般人の発話の場合、感情の表出の程度は高くなることもある。

表2に示したように、これら6つの要素の特徴により、対象としたテレビ番組から、〈トーク〉、〈報道・中継〉、〈報道・読み上げ〉、〈情報・会話〉、〈情報・読み上げ〉という、5つのジャンルが抽出された。

4. テレビ番組にみられる発話行動の諸ジャンルからみたテシマウ相当形式

本節では、前節で整理した発話行動の各ジャンルの特徴をふまえ、テシマウ相当形式とジャンルとの間に何らかの相関関係があるかどうかを検討する。

4.1 全体的傾向

分析した資料には、テシマウ相当形式のうち、テシマウ、チマウ、チャウの3形式が出現した。さらに縮約の進んだ「ヤッチッタ／ヤッチッテ」のような例は認められなかった。各形式のジャンル別出現数を表3に示す。

表3 テシマウ相当形式のジャンル別出現数

形式 ジャンル	テシマウ	チマウ	チャウ	計
トーク	8	1	52	61
報道・中継	4	0	0	4
報道・読み上げ	2	0	0	2
情報・会話	5	0	27	32
情報・読み上げ	18	0	79	97
計	37	1	158	196

表3をみると、テシマウ相当形式の出現数はジャンルによって大きく異なっていることがわかる。出現数が多いのは〈トーク〉、〈情報・読み上げ〉、〈情報・会話〉の3ジャンルで、テシマウ、チマウ、チャウ3形式の合計数はそれぞれ、61例、97例、32例に上る。他方ほとんど出現していないのは、〈報道・読み上げ〉と〈報道・中継〉の2つである。前三者と後二者で出現数が大きく違うのは、「感情の表出」の程度と関係があると考えられる。すなわち、前三者は自分自身の主観や感情を聞き手に伝えようとする傾向が強く、「感情の表出」の程度が高いのに対し、発話者の主観を廃した客観的報道が求められる後二者の場合、「感情の表出」の程度が低く、事態の実現を感情・評価的に表すテシマウ相当形式は回避される。

そのなかで〈報道・中継〉、〈報道・読み上げ〉に出現したテシマウ相当形式をみると、〈報道・中継〉では、記者会見の代表者、事件の第一発見者、地震調査団員の発話という、「感情の表出」の程度が高くても問題のない発話に、〈報道・読み上げ〉では、賞金女王を狙っていたプロゴルファーの宮里藍選手がミスショットを打ち惜敗したというニュースを伝える部分に、それぞれ出現していた。次に示す(1)は〈報道・読み上げ〉の例である。

- (1) 男性アナウンサー：まずはゴルフ。史上最年少の賞金女王を目指す19歳の宮里藍選手です。今シーズンの最後のラウンドにのぞみました。一中略一迎えた14番。宮里の第2打。バンカーにつかまります。続く第3打。出すことができず このホール痛恨のダブルボギー。ついに不動に並べられます。そして17番のティーショット。後半は力んでしまったと宮里。林の中に入れてしまい 勝負がつきました。

(2004年11月28日、ニュース7)

用例のうち「力んでしまったと宮里」は、引用節中に出現した例であり、宮里藍選手のインタビュー時の発話が反映されていると考えられる。一方の「入れてしまい」は、引用節中の例ではない。それでも使用されたのは、政治や社会に関する報道ではなく、出来事を感情的に伝えてもそれほど問題にならない、スポーツの報道であるからだろう。

次に、ジャンル別に出現した形式をみると、〈報道・中継〉、〈報道・読み上げ〉の2ジャンルは、文章的・書き言葉的な表現が好まれるため、非縮約形のテシマウしか出現していない一方、「口語性」の高い〈トーク〉、〈情報・読み上げ〉、〈情報・会話〉の3ジャンルでは、チャウが多用され、出現数においてテシマウをはるかに上回っていた。また、今回の資料でチャウが出現したのは〈トーク〉だけで、しかも1例のみであった。テシマウ、チャウに比べぞんざいなチャウは、視聴者に対する待遇的な考慮が必要なテレビ放送には相応しくないため、どのジャンルでも使用されないものと考えられる²。

以上の考察から、テシマウ相当形式と発話行動のジャンルとの間には、次のような相関があるといえる。

- (2-1) テシマウ相当形式は、「感情の表出」の程度が高い〈トーク〉、〈情報・読み上げ〉、〈情報・会話〉には出現するが、これが低い〈報道・中継〉、〈報道・読み上げ〉にはほとんど出現しない。
- (2-2) チャウは、「口語性」が低く、書き言葉的な表現が好まれる〈報道・中継〉、〈報道・読み上げ〉には出現しないが、「口語性」の高い〈トーク〉、〈情報・読み上げ〉、〈情

報・会話)には多用され、テシマウの出現数をはるかに上回っている。

(2-1), (2-2)をテシマウ相当形式の使用傾向からみると、テレビ番組における発話行動のジャンルは、〈報道・中継〉, 〈報道・読み上げ〉と〈トーク〉, 〈情報・読み上げ〉, 〈情報・会話〉の2つに分けられる。しかし, 「口語性」, 「感情の表出」の点で共通する後三者にも, テシマウ相当形式に前接する動詞をみると顕著な違いがある(詳細は4.2で述べる)。

4.2 テシマウ相当形式に前接する動詞

ここでは、テシマウ相当形式に前接する動詞について検討する。テシマウ、チャウそれぞれについて前接する動詞別に出現数を示したものが表4, 5である。これらの表では、前接する動詞を、単純動詞、受身動詞、使役動詞、複合動詞、テ補助動詞、可能表現(可能動詞、助動詞ラレル、コトガデキル)に分けている。また、単純動詞における()内の数値は、「可能」と密接に関わる単純動詞デキルの出現数である³⁾。

表4 テシマウの前接動詞別出現数

形式 ジャンル	単純動詞 (デキル)	可能表現			受身 動詞	使役 動詞	複合 動詞	テ補助 動詞	計
		コトガ デキル	可能 動詞	助動詞 ラレル					
トーク	8(0)	0	0	0	0	0	0	0	8
報道・中継	3(0)	0	0	0	0	0	0	1	4
報道・読み上げ	2(0)	0	0	0	0	0	0	0	2
情報・会話	4(0)	0	1	0	0	0	0	0	5
情報・読み上げ	16(0)	0	0	0	0	0	2	0	18

表5 チャウの前接動詞 別出現数¹⁾

形式 ジャンル	単純 (デキル)	可能表現			受身 動詞	使役 動詞	複合 動詞	テ補助 動詞	計
		コトガ デキル	可能 動詞	助動詞 ラレル					
トーク	42(0)	0	1	0	2	0	0	7	52
情報・会話	23(2)	0	2	0	0	0	2	0	27
情報・読み上げ	49(8)	2	22	1	0	2	3	0	79

i) 〈報道・中継〉と〈報道・読み上げ〉はチャウが出現しないので表から除く。

表 4, 表 5 をみると, テシマウ, チャウともに, 前接する動詞はどのジャンルでも単純動詞の場合が圧倒的に多くなっている。しかし, ここで注目したいのは, 〈情報・読み上げ〉に出現したチャウに, 可能動詞をはじめとする可能表現の前接例が目立つという点である。チャウに前接した可能表現の出現数は, 表 5 により, 可能動詞 22 例, コトガデキル 2 例, 助動詞ラレル 1 例, 単純動詞デキル 8 例で, 合計で 33 例に及んでいる。このような「可能表現+チャウ」は, 視聴者に日常の問題を解消する行為を促すという, 「行為の働きかけ」の程度が高い文脈で多用されている。以下にその例を示す。(3)は可能動詞, (4)はコトガデキル, (5)は助動詞ラレル⁴, (6)は単純動詞デキルの主格が「連射」というコト名詞になっている例である。

- (3) 女性ナレーター：見ているだけで幸せな気分になれるかわいーブチケーキ。－中略－でも家で小さなスポンジケーキを作るのは面倒ですよー。ところがそれがなんと電子レンジでたった 40 秒チンするだけで 簡単に作れちゃう。

(2004 年 11 月 30 日, 伊東家の食卓)

- (4) <夜屋外で写真撮影をする際, 赤目に写るのを防げる方法を実験しているところで>
男性ナレーター：普通はあんなに真っ赤になっちゃったのに 裏技はみーんな目が黒く写っています。－中略－他の人も見てみたところ 今回の実験では なんとみなさん赤目に写るのを防ぐことができちゃいました。

(2004 年 11 月 30 日, 伊東家の食卓)

- (5) 女性ナレーター：イタリアンデザート定番ティラミス。とろけるよーなめらかな口当たりと こくのある深い苦味がおいしーですよー。おしゃれでありながら 気楽に食べられちゃうカジュアルさが 今なお根強い人気を生んでまーす。

(2005 年 1 月 25 日, 伊東家の食卓)

- (6) <おもちゃのカプセルを使った水鉄砲の利点について説明しているところで>
男性ナレーター：カプセル水鉄砲。4, 5 メートルは飛ばすことができます。色の付いた方はやわらかい素材でできているので 何度も押せば連射もできちゃいます。

(2004 年 11 月 30 日, 伊東家の食卓)

(3)は, 面倒なスポンジケーキ作りが電子レンジで 40 秒加熱すれば簡単にできることを, (4)は, 夜の屋外で写真撮影する際に「裏技」を使えば赤目写真が防げることを, (5)は, おしゃれなのに気楽に食べられるティラミスは人気があるということ, (6)は, おもちゃのカプセルで作った水鉄砲はやわらかい素材でできているので連射も可能であることを, そ

れぞれ表している。これらはいずれも、ある事態が可能な状態として実現することを表すが、その前提には、「その事態は通常ならば実現不可能である」という発話者の推測が必要であると考えられる⁵。このことは、こうした推測の余地がない文脈、例えば、動作主体の生得的な能力を表す(7)、動作対象の恒常的属性を表す(8)のような場合、可能表現にテシマウ相当形式が後接すると不自然になることから窺える。

(7) 太郎は 数学が {できる / ??できちゃう / ??できてしまう} (作例)

(8) この茸は {食べられる / ??食べられちゃう / ??食べられてしまう} (作例)

ここまで、「可能表現+テシマウ相当形式」の意味的特徴について考察してきた。しかし、テシマウが可能表現に前接する例は1例しかなく、同じ文法的意味を表すチャウとの間に、なぜこのような差があるのかを明らかにする必要がある。

結論から言えば、テシマウとチャウとで可能表現との共起に違いがあるのは、両形式が「発話者にとっての望ましさ」という語用論的意味において異なる傾向を示しているからである。すなわち、発話者(話し手)にとって望ましくない事態の実現を表すことが多いテシマウは、「話し手の期待(待ち望み)」⁶という語用論的意味を要する可能表現と意味的にそぐわず、これとほとんど共起しないが、チャウは、望ましくない事態の実現だけでなく、望ましい事態の実現にも用いられるので、これと容易に共起すると考えられる(第5節参照)。

5. 発話者にとっての望ましさ

4.2では、可能表現との共起をめぐるテシマウとチャウの相違について述べ、それが「発話者にとっての望ましさ」からみた時の両形式の違いにもとづくものであるとした。しかし、この違いはあくまでも語用論的意味のレベルの問題であり、先行研究でも、「どのような出来事が話し手に悪い評価をもたらすかは、文脈に依存する部分が多く、法則的には決定できない」とされている(金水 2000:68)。それでも筆者は、実例をもとに形式ごとの傾向を見出すことは可能であり、また、形式間の相違を検討する上で必要な作業でもあると考え、テシマウ、チャウそれぞれについて「発話者にとっての望ましさ」を検討することにした。

表6は、「発話者にとっての望ましさ」別に出現数とその割合を示したものである。分類にあたり、事態が発話者にとって明らかに望ましいと判断される場合は(+), 明らかに望ましくないと判断される場合は(-), (+)・(-)の判断がつかない、どちらともいえない

場合は(±)としたが、筆者一人の判断によるため、別の日本語母語話者が分類した場合、多少のずれが生じる恐れがある。しかし、そこで生じるずれは、事態が望ましいものか(或いは望ましくないものか)判断できないものを、(±)とするか、(+)/(-)とするかで生じるものと予想され、各テシマウ相当形式が(+)/(-)のどちらに傾いて使用されるかという分析の焦点にはそれほど影響しないと思われる⁷⁾。

表 6 発話者にとっての望ましき¹⁾

形式 望ましき	テシマウ	チャウ
(+)	2 5.4%	68 43.0%
(±)	8 21.6%	20 12.7%
(-)	27 73.0%	70 44.3%
計	37 100.0%	158 100.0%

i) テシマウ(1例)は、(-)であった。

表 6 から読み取れるのは、「発話者にとっての望ましき」に関し、チャウは(+)の場合にも(-)の場合にも同程度用いられている一方、テシマウは(-)の場合に使用されることが多く、(+)での使用はめったにないということである。つまり、両形式には「発話者にとっての望ましき」において傾向の違いが認められるといえよう。

なお、出現数の多いチャウはジャンル別に検討してみたが、どのジャンルにも、(+), (-)とも出現し、「発話者にとっての望ましき」に関し、極端な偏りはみられなかった。

6. おわりに

本稿では、テレビ番組の文字化資料から発話行動のジャンルを抽出し、各ジャンルとテシマウ相当形式との関連性について考察した。明らかになったのは以下の点である。

- (9-1) テレビ放送では、間接的な聞き手である視聴者に対する待遇の考慮が求められるので、ぞんざいなテシマウは通常使用されない。
- (9-2) テシマウ相当形式は、「感情の表出」の程度が高い〈トーク〉、〈情報・読み上げ〉、〈情報・会話〉には出現するが、これが低い〈報道・中継〉、〈報道・読み上げ〉にはほとんど出現しない。
- (9-3) チャウは、「口語性」が低く、書き言式的な表現が好まれる〈報道・中継〉、〈報道・読み上げ〉には出現しないが、「口語性」の高い〈トーク〉、〈情報・読み上げ〉、〈情報・会話〉には多用され、出現数ではテシマウをはるかに上回っている。

- (9-4) 〈情報・読み上げ〉のチャウには、「行為の働きかけ」の程度が高い文脈で、可能表現に後接する例が多くみられる。そして、全体として、発話者が「通常ならば不可能である」と推測している事態が可能な状態として実現することを表す。
- (9-5) テシマウとチャウの間には語用論的意味の相違があり、テシマウは発話者にとって望ましくない事態の実現を表すことが多いが、チャウは望ましくない事態の実現だけでなく、望ましい事態の実現についても多用されている。

さらに、上の結果を当該形式の使用にどの要素が影響しているのかという点から捉え直すと、影響を与えているのは「聞き手」、「口語性」、「感情の表出」、「行為の働きかけ」の4要素で、残る「談話型」と「文体の変動性」はそれほど影響していないと考えられる。

最後に、本稿で発話行動のジャンルの抽出に用いた6つの要素の応用性について、2点指摘しておく。

一つは、他の資料への応用性である。6つの要素の組み合わせによるジャンルの抽出は、宗教上の説教等のその他のジャンルの考察や、散文等の創作資料における発話行動のジャンルの分析にも有効であると思われる。

いま一つは、複数の形式が併存する他の文法項目への応用性である。同じ文法的意味を表すのに複数の変種がある文法項目は、テシマウ相当形式以外にもある（否定を表すナイ／ネーなど）。しかし、テシマウ相当形式の場合と同じ要素が形式の選択に影響しているとは限らないので、この点について明らかにするには、同様の調査を行い、その結果を比較・検討すれば良いだろう。さらに、このような作業を積み重ねれば、形式間の選択に影響しやすい要素（影響しにくい要素）があるのか、同じ要素に影響を受ける文法項目同士に共通点があるのかといった、より一般的な問題についても解明できる可能性がある。

また本稿は、資料の選定が文法項目のふるまいに影響することを示した一つの事例でもある。これからの共時的研究には、こうした視点が今後ますます重要になってくると思われる。

注

1. テレビ番組の分野の分け方には、情報配信メディアにより多少のずれがある。例えば、テレビ番組情報サイト「ON TV Japan」では、「ドラマ、映画、スポーツ、演劇、音楽、バラエティ、ニュース・報道、趣味・実用、ドキュメンタリー・教養、アニメ・特撮、キッズ、教育、情報、その他」に細分化されている。これらの分野のうち、ドラマ、映画、演劇、アニメ・特撮、スポーツ、音楽、キッズ、教育は、本稿でねらいとする実際の話し言葉資料として使用できないか、使用できたとしても一部に限られるので、考察の対象か

ら外した。残る分野は、視聴者を想定したモノログ中心のニュース・報道、ドキュメンタリー・教養と、番組の参加者同士のやりとりが内容上重要な位置を占めるバラエティ、趣味・実用、情報に大きく分けることができるが、後者のうちでも、参加者同士のやりとりが主であるトーク番組と、参加者同士のやりとりを通じて視聴者に新規の情報を紹介する趣味や情報に関する番組とでは質が異なると思われる。そこで本稿では、トーク番組と情報・バラエティ番組、報道・ニュース番組の3分野について考察することにした。

ON TV Japan のサイトは <http://www.ontv japan.com/program/gridGenre.php>

2. チマウの例を示す。〈男性ゲストのオチを女性ホストが先に言ってしまったところで〉

男性ゲスト：芸人殺しー。芸人殺しー。ちょっと俺はそれはおしてたとこだったののためにためてーしっとりした話の後にここだと思った瞬間に(女性ホスト：あのあとだったんだ師匠) ちきしょーやられちまったよー。(女性ホスト：(笑い))

(2003年8月25日、はなまるマーケット)

チマウが使用されたのは、発話者の憤りの感情がいわば独話的に表出された発話であるため、つまり、直接の聞き手であるホスト、間接的な聞き手(脇の聞き手)である視聴者から切り離された、待遇的な考慮を必要としない発話であるためと推測される。

3. 本稿では、派生接辞等がつかない普通の動詞を「単純動詞」、五段動詞に $-e(-ru)$ 、一段動詞及び力変動詞に $-re(-ru)$ をつけたもの(いわゆる「ら抜き」)を「可能動詞」、 $-(r)are(-ru)$ のついた動詞を「受身動詞」、 $-(s)ase(-ru)$ のついた動詞を「使役動詞」、「滑り出す」「飲み込む」等を「複合動詞」、 $-teik(-u)$ 、 $-teku(-ru)$ のようなテ中止形につづく補助動詞を「テ補助動詞」、「勉強スルコトガデキル」などを「コトガデキル」と呼ぶ。従来「動詞未然形+助動詞ラレル」とされる、 $-(r)are(-ru)$ をつけたものは、「助動詞ラレル」とし、可能動詞とは区別する。また単純動詞「デキル」には、漢語サ変動詞、外来語サ変動詞の可能表現である「コト名詞デキル」の他、「コト名詞ガ+デキル」「モノ名詞ガ+デキル」、「副詞的成分+デキル」等がある。

4. (5)に対しては、筆者自身はやや違和感をおぼえる。小矢野(1980)は、「*食べられてしまう」のような助動詞ラレル+テシマウ相当形式では、助動詞ラレルは可能というよりもむしろ受身を表していると解釈するべきであるとしている。また、渋谷(1993)は、「?君はまだシャツも着られていないのか。早くしないと遅れるよ」のように、ラレル可能のテイル形はやや不自然であるとし、その理由を形式的に受身のテイル形と衝突するためではないかと推測している。用例(5)の場合も、「気楽に食べれちゃうカジュアルさ」のように、受身と解釈する余地のない可能動詞にすれば不自然さは薄れるように思われる。

5. テシマウ相当形式が可能表現と共起する場合、鈴木(1998)はそこに何らかの条件の明示が必要であることを指摘した。確かに、今回のデータでも、(3)、(4)のように、不可能なはずの事態を可能にする何らかの条件が明示されている場合が多かった。しかし、(5)をみると、「ティラミスが気楽に食べられる」ようになるための条件が想定されているとは考えられない。こうした実例があるので、筆者は「可能+テシマウ相当形式」文の成立には条件の明示が必須であるとする鈴木(1998)の説には賛同しかねる。

6. 「話し手の期待(待ち望み)」は渋谷(1993)に拠る。渋谷(1993)は、可能文成立に必要

な語用論的意味について、「可能文の補文の命題内容は、動作主体にとって、その動作の実現が望ましい（厳密には、動作主体にとって望ましいと話し手が推量する）ことがらを表すものでなければならない」と述べている（渋谷 1993:236）。

7. 「発話者にとっての望ましさ」ごとに例を挙げる。

(+) 女性タレント：ねー みほこ見てー。新しー携帯電話買っちゃった。

(2005 年 1 月 25 日、伊東家の食卓)

(-) 女性ナレーター：年末の大掃除とかにもやるとありますが エアコンフィルターの掃除って 埃がはじっこに残っちゃったり かといってー お風呂場で水洗いするの面倒。

(2004 年 12 月 14 日、伊東家の食卓)

(±) 女性タレント：そしたらですねー そこに プリンをカaramelごとそのまま入れちゃってください。

(2005 年 1 月 25 日、伊東家の食卓)

謝辞

本稿をまとめるにあたり有益なコメントを下さった小西いずみ氏、中川美和氏、ダニエル・ロング先生、荻野綱男先生に感謝致します。

引用文献

金水敏(2000)「時の表現」『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店

金田一春彦(1955)「日本語のテンスとアスペクト」金田一春彦(編)(1976)所収

金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 所収

小矢野哲夫(1980)「現代日本語可能表現の意味と用法(Ⅱ)」『大阪外国語大学学報』48 言語編

渋谷勝己(1993)『日本語可能表現の諸相と発展』大阪大学文学部紀要 33-1

鈴木智美(1998)『『てしまう』の意味』『日本語教育』97

高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」金田一春彦(編)(1976)所収

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版

畠弘巳(1983)「場面とことば」『国語学』133

藤井由美(1992)『『てしまう』の意味』『ことばの科学』5 むぎ書房

Hymes, D. (1974) “*Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*.” University of Pennsylvania Press, Philadelphia (唐須数光訳(1979)『ことばの民族誌—社会言語学の基礎—』紀伊國屋書店)

(やない ひさえ・東京都立大学大学院生)